前田夕暮について

玉縄恵美子

—短歌ゼミ—

前田夕暮は、浪漫的な技巧主義に反ぱつし文壇に全盛を極めた自然主義の風潮を浴び、車前草社を主宰した尾上柴舟の影響を受け、理智的、思想的な実生活に即した歌をよんでいる。

当時（＝明治四十年前後）日本帝国は、戦争に勝ったが、市民生活はじめじめと憂うつで次々におきる社会問題は手に負えぬ状態であった。そして青年は相次いで紹介される西欧思想と日本の現実の差に心を痛めちょうど紹介された自然主義に耳を傾け、この思想を実生活に生かそうと悩んだということである。

歌壇では『明星』の人と作品が現実遊離であるとして非難され、車前草社は『反明星』ということを意識することにより自然主義へと傾いていったのである。

夕暮は明治三十九年、その社前草社を脱退し白日社を作った。社名は明治四十年に発行した雑誌『向日葵』が明星の星に対して、向日葵の日であるということから、その日が発達したのである。『向日葵』での明星批評は痛烈であり、その態度は世に迎えられた。

明治四十四年、彼は『詩歌』を創刊し、『出来あがることのない無限に向ってあこがれる（中略）歌も或る場合、人生の批評であり、実生活の記録であると言い得ないであろうか、然し単なる記録ではない。作者全体が歌に這入り込んでゆくとき、作者の生命が刻み込まれたるその刹那の記録だ云々。』と述べている。その後『詩歌』は遅刊もせず、多くの新進歌人を順調に養成した。が大正七年『私は自分の思想転化のために雑誌発行の無意義さを痛切に感じてきた。そこで自分個人の心境から我と我家に火を放って焼いてしまった。そして私は再び無一文になって、青空の下に立たねばならなくなった。』と述べ、夕暮は詩歌を廃刊としてその記念に『青空』を出した。この廃刊はアララギから強く批評されたためとも言われており、夕暮のねばり強さのたりない面をうかがわせる例であろう。

彼は自然主義短歌を『陰影』で、ぎりぎりまで押し進めることを試みたので、作品は醜悪面を持ち、暗いものとなった。

大正期に入ると、神経質で弱々しい体軀をしていた

夕暮も家庭を持ち、三十代に入ると体軀は充実し、精神的にも否定から肯定へと向いつつあった。第三歌集『生くる日々』はこの時代のものである。この歌集に対する古泉千樫の批評にも『前には扉のまえにたたずみて自らを寂しみ、または扉に後を向けて、自ら嘲りあわれむ様なところがあったが、『生くる日に』に至っては、その扉を打ちこわそうとしている。躍り入ろうとしている。』という文が見られる。この歌風は第四歌集『深林』にいたり、そのまま押し進められた。そこに夕暮の体質として自然主義の『現実暴露的精神』にわざわいされて作品のおもてに強く出ることのなかった『感覚』が主要な要素としてあらわれてきたのである。『深林』以降は、自然主義短歌に嫌悪を感じ、外光的効果をねらった。と自ら述べているような傾向の歌になっている。

詩歌休刊中は有志間で『耕人』という回覧誌を出し、相互評を続け大正十二年『天然自然の歌』を発表し、アララギ流の完成期に近づこうとしていた歌壇に、極めて素朴な作風で衝動をあたえた。これが縁で北原白秋との親交が初まり、雑誌『日光』の創刊の一因をなしたということである。日光はアララギ全盛の情勢下において、諸派結社の分立が目立った文壇で、それらの結社に不満を持ち、自由な歌人の集合体を結成するため創刊されたものであり、この時代の夕暮の作品は未刊の歌集『南風』に収められている。

昭和三年『詩歌』が復刊し四年に入ると全面的に自由律歌に変わった。ところが戦時期に入ると自由律で重量感、等時性ということを言い、次第に定型への郷愁を持ちはじめ定型にもどっている。

戦後の歌材、思想の変化、日本の押韻の可能を探った『マチネ・ポエチック・グループ』との関係など興味ある問題点を残している。

参考図書

日本詩人全集（新潮社）
現代短歌手帖・木俣修・安田章生（創元社）
近代短歌の歴史・森脇一夫（桜凡社）
近代文学鑑賞講座・山本健吉（角川書店）
大正文学史（岩波書店）
近代短歌の史的展開・木俣修（明治書院）
日本文壇史・伊藤整（講談社）